

満州

私の引揚げ体験

秋田県 滝口マサ

一 はじめに

今、世の中の目はアフガニスタンやイラクの戦後復興に向けられています。しかし、戦争の悲惨さは、いつの時代の戦争でも変わることなく、いくら語っても語り尽くせるものではありません。

また、今から五十数年前に日本人が体験した悲惨な出来事は、時間が経つにつれてその記憶が次第に薄れていきます。まして、この体験を共有する人たちがだんだん少なくなり、戦後生まれの世代が多くなってきた現在では、あの忌まわしい終

戦の時の困難で苦しかった避難行と引揚げ体験を語る方々が高齢になり、年々少なくなつて参りました。また、私自身も老齢となり、資料も散逸し、記憶も薄れてきました。そこで、少しでも記憶のある今のうちにと思つて筆を執ることにしました。

二 渡満の動機と弥栄村での生活

私の夫、昌太郎は昭和七（一九三二）年に第一次武装移民団の一員として弥栄に入植し、開拓に従事しました。開拓に当たつてはいろいろと困難があつたようですが、昭和十年には私も大陸の花嫁として満州に渡りました。

新潟港から北朝鮮の清津港まで船に乗り、途中でどこを通つたのか記憶は定かではありませんが、ハルビンから松花江を武装した兵隊さんに守られ

て、船で佳木斯に上陸したのを憶えております。

結婚後は、夫の夢見た王道楽土の理想と悠々たる生活を実現できるように二人で力を合わせて酪農や養豚・養鶏などの営農に励みました。

最初は集団経営、そしてある程度の開拓基盤が固まると、個人経営へと経営のやり方は変わりましたが、開拓にかかる夢は微塵にも揺るぐものではありませんでした。

そして、私は女学校に行けなかった分、村の補習学校などで裁縫や手芸などを習い、また母親からは毛糸の紡ぎ方や布の織り方などを教えられていましたので、弥栄での生活にそれが大変に役立ちました。また、地元の羽陽屯に住んでいる原住民の方々もみんな協力的で、親戚同様のつきあいをしていました。

昭和十二年には長女昭子が生まれました。さらに十四年には二女和枝、十七年には長男正克が、そして二十年には三女ミヨシが生まれました。長男誕生の時は午前中まで畑で働いていて、急に産

気づき午後には生まれたので、地区の人たちにはみんなびっくりされました。本当に生まれたのかと、皆さんになかなか本気にしてもらえませんでした。

営農は順調で、家族にも恵まれ弥栄時代の生活が一番安定し、ゆとりが出てきていたように思います。

この間いろいろなことがありました。長女を実家の母に合わせるために、幼児を背負って遙々里帰りをしたこともあり、また長男が二歳半のときに中耳炎で佳木斯医科大学病院に入院させたときのこと。病院の風呂に入浴中に長男に大便をされ、慌ててタオルにくるんで捨てたり、手術の時には麻酔が今ほど発達していなかったので、インターンの学生が六人がかりで長男を押さえつけてくれたことなど、思い出すと次から次と浮かんできません。長男は小さいとき病気がちで、目の病気や中耳炎といろいろと病気をし、村の病院では処置ができないので、医科大学病院に列車で通い、診察

治療してもらったことなどもありました。

また、満州には狼がいて、家畜が襲われたことも何度かありました。でも、作物はたわわに実り、日本国内では味わうことのできない素晴らしい大規模農業が可能だったのです。

夫は暇になると、よく、二・三歳になったばかりの長男を連れて近くの柳樹河に釣りに出かけることがありました。長男は今でもこのことをよく憶えていて、河の近くに鉄橋があり、自分は首まで水に浸かって、父親の釣りを見ていたということと話してくれることがあります。本当に平和で、のどかな農村風景がここにありました。

ところが、その平和でのどかな生活の夢が破れ、昭和二十年の七月には夫が召集されてしまいました。長男は三歳になったばかりでしたが、この時、駅に父の出征を見送りに行った記憶があるそうです。

夫は佳木斯第八三一部隊に入隊し、我が家では働き手の男がいなくなってしまったのですが、

今まで雇っていた地元の満人の助けを借りて営農を続けておりました。

三 逃避行

しかし、忘れもしません。昭和二十年の八月十一日夜に、ソ連軍の満州侵攻によって弥栄も危険になったというので、組合本部から「十二日の朝に弥栄駅に集合せよ」との連絡が入り、慌ただしく避難の準備をしました。

いつも手伝ってもらっている満人の親方を家に呼び、「三日以内に帰って来なかったら、家畜や家財をみんな分けるように」と言って後事を頼み、十二日の早朝に共同生活した家から夫婦して一生懸命に働き、やっと念願がかない移り住んだ家を離れました。本当に何とも言えない、二度と戻っては来れないかもしれない、そんな気持ちで振り返り振り返りして、今まで住んでいた家を眺めると、自然と涙が出ました。近所の満人の人たちが見送りしてくれました。

四月に生まれたばかりの三女のみよシは、夏休

みで寄宿舎から羽陽屯の家に帰省していた小学校三年生の長女の昭子が背負い、三歳になったばかりの長男の正克を私が背負って、五歳の二女和枝の手を引いての逃避行が始まったのです。

四人の子連れでは、食糧も着替えも十分なものは持てず、本当に着の身着のままでの避難生活の開始となりました。これは何ともつらく厳しいことでした。

日中は真夏の厳しい暑さでしたが、鉄板一枚の屋根の有蓋車に乗ると、その蒸れるような暑さに、また反対に無蓋車に乗せられたときは猛烈なスコールに見舞われ、車内には雨水がたまり座っていることもならず、子どもたちも大人の膝の上に乗ってきます。

身動きのできない車内では、雨に降られ濡れた体には夏とはいえ北満の夜の急激な気温の変動による寒さで、体の弱い赤子が衰弱してしまい次々と亡くなっていくのです。

そして、とにかく避難列車は走れるだけ走り、

滅多に停車はしませんでした。停車してもいつ発車するか分からないので、亡くなった子どもを埋葬することもできず、走っている列車から途中で通過する川に投げ捨てて勝手な水葬にしたり、ごみと同じように線路脇に投げるより他はないのです。

子どもを亡くした母親はまったく哀れでした。いつ自分たちもそういう目に遭わないとも限らないのです。それでも、避難列車に乗れた私たちは恵まれた方なのです。奥地の開拓団の人たちの中には、列車にも乗れず徒歩で陸路を避難し、悲劇的な最後を遂げた団体がたくさんあったのです。

何日かの列車の旅の末に、綏化に着きました。綏化ではつい先日まで日本軍の航空隊が使用していた格納庫に収容されて、コンクリートの床の上での生活が約一カ月続きました。九月になると、北満の気候は日増しに寒くなってきます。そうこうしているときに、二女が履いていた靴を大事に荷物の上にそろえて置いていたところ、盗まれて

しまいました。人間窮すると何をするか分からないものです。本当に天を恨み、周囲の人たちを恨めしく思いました。仕方がないので、長女が自分の靴を履かせ、本人は裸足で大連までの道中を過ごすことになりました。大連で、避難民の一行を温かく迎えてくれた親切な在留日本人の方に靴をいただくまで、この状態だったのです。私にもどうすることもできませんでした。本当にかわいそうなことをしたなど、今でも長女のつらかったことを思い出すたびに涙が出ます。

綏化での一カ月ほどの避難生活の間でも、たくさん子どもが飢えと寒さと病気で亡くなったのです。

綏化からは幸いに客車に乗ることができて、ひたすら大連に向かって南下しましたが、停車駅での暴民と化した朝鮮人や中国人そして、それ以上に残酷なソ連兵などによる略奪・暴行はすさまじいものでした。

奉天（今の瀋陽）で途中下車させられて、駅前

広場に集められたときに、私たちの一団は中国人の略奪に遭い、わずかに残っていた荷物さえも奪われてしまいました。どうすることもできない無力感を実感させられたものです。

弥栄村で、あの穏やかで隣人として仲良く暮らしていた満州の人たちとは民族が異なるのではないかと思うほど大違いでした。

ただ、皆がそうだったわけではないとは思いますが、戦争によってその置かれた立場の逆転した国においては、敗戦国のしかも国の保護のない人間の惨めさを嫌というほど味わいました。

そして、避難中一番つらいと思っただのは、引揚者のどなたも言われていますが、子どもに「おなか減った！」と言われることです。四人の子に食べさせたくとも、食べ物が手に入らないのです。いつも、腹いっぱい食べさせたいと思うのですが、頼りになる夫もいないのです。本当につらいと思いました。

ようやく列車での避難行動が終わり、避難列車

は大連の駅に着きました。

引き揚げるまでの一時避難所となったのは、大連実業学校の校舎でしたが、そこまで歩いて行く道のりは本当に遠く感じたものでした。沿道では、まだ大連に残留していた在留邦人の温かい歓迎を受けました。

そして、綏化の飛行場格納庫で二女が盗まれた靴の代わりに自分の靴を履かせ、裸足でいた長女に靴をプレゼントしてくれたのも、このときの邦人の親切な方でした。

一時避難所の大連実業学校での生活は、教室に何十人という人たちが一緒に入って寝泊まりしていました。所持していたお金も残り少なくなり、子供四人に何かを食べさせるためにも私が働いてお金を稼がなければなりませんでした。

働きに出掛けるときは、乳飲み子の三女を背負って外へ働きに出て、幾ばくかの食べ物を手に入れて帰ってきました。洗濯やら掃除やら、ときには稼いだお金でリンゴを仕入れて駅前で売ったり

もしました。

小さい子どもを背負っての仕事は大変なことでしたが、見るに見兼ねて子どもの衣服を下さる人もいて、随分と助けられたものです。

洗濯仕事をしていたときに、ポケットに小銭が入っているのを見付けて雇い主に届けて「お前は正直だ！」ということで、給金を多く頂いたこともありました。

仕事のなかで一番お金になったのは、便所などの汲み取り作業でした。糞尿だけでなく、油を絞ったかすなどをマンホールに流し込む作業でした。汚く臭い作業だけに大変でしたが、水やお湯を使わせてもらえたので、身体を洗ったり衣服を洗濯したりすることができたので、とても助かったこともありました。

日本が敗戦国になったということで、そんな汚くてよごれるような仕事は中国人の人たちがやらなくなっていて、日本人にやらせろと言っていたからです。

また、収容所からちよつと離れた鏡ヶ池に行き衣類を洗濯し、それが乾くまで水浴をしたり、老虎灘の海岸に行って、シャコやアサリなどの貝や、昆布などの海藻を拾ってきて子供に食べさせていました。海水浴をしたこともあります。風呂がない避難生活でしたから、海水浴ができたことは大変に有り難いことで、そんなふうに行っているろと工夫をした生活をしていました。「貧すれば鈍する」ではなく、「貧すれば通じる」でした。

そうこうしているうちに、召集されたまま音信不通だった夫がシベリアに送られる途中のソ満国境付近の駅で、六十数人の人たちが謀って反対方向の列車に飛び乗り逃げてきたとのことで、そのうち二十数人が家族をたずねながら奉天にたどり着き、家族の元に帰ってきたのです。

もう二、三日夫の戻りが遅かったら、二女は栄養失調で命を落とすところでした。全身に栄養失調特有のむくみが出て、下腹が膨らんできていたのです。まさに間一髪でした。本当に運が良か

ったと思いました。

家族思いの夫には、感謝の念でいっぱいです。召集された夫は佳木斯から満ソ国境方面に向かい、ソ連軍との戦闘で負傷し、野戦病院に送られたそうです。その後終戦で武装解除されてソ連軍の捕虜となり、ナホトカから内地に送るといふ、ソ連軍の話にだまされて列車に乗せられたそうですが、北満一帯の地理に詳しい夫たちは、これはシベリアに送られるのではないかといいことを察知してソ連軍を買収して、命懸けでシベリア送りの列車から脱走して、反対方向の貨物列車に潜り込み、ただひたすら家族に会いたいという一念で、国境から避難民の消息を尋ねながら、約二千キロメートルの逃避行をしてきたのです。

そうやってやつと家族に再会できたのは奇跡でした。その間、夫は二度ほど八路軍に捕まったそうですが、武器を持っていなかったのですぐに釈放されたということです。これがソ連軍だったら確実にシベリア送りになっていたか、もっとひど

いと銃殺されていたのではないかと思ひ、ぞつと
して背筋に悪寒が走るようです。

收容所の学校の門は、略奪や暴行に備え自警団
によつて嚴重に警備されていましたが、銃などは
もちろんありませんから、中国人やソ連兵が入ろ
うと近づくと、それを知つた者がバケツなどを
んがんだたいて、追い散らしていました。

夫との再会の時もそうでした。なにしろ、目だ
けがぎよるぎよるしている髭面で、ぼろぼろの服
を着た得体の知れない男たちがやってきたので
から、だれもが暴徒と思つていました。でも、私
にはすぐに夫だと分かりました。氏名を名乗つて
きたので、みんなは日本人だと分かり門を開けて
もらひ、無事再会することができました。

夫は翌日からすぐに大連のドックに働きに出て、
帰りには黒パンをもらつてきましたが、それが私
たち家族の命の綱でした。收容所では、高粱コーリヤンのお
粥の配給などもありましたが、それだけではとて
も命を繋ぐことはできません。

二十年の十二月になると私の乳が出なくなり、
三女はどうとう栄養失調のうえにジフテリアにか
かりましたが、手当するにも薬もなく、とうとう
八カ月の短い生涯を終えました。しばらくは涙が
止まりませんでした。そのうちに涙も枯れてし
まいました。

大連実業学校の校庭の向こう側の裏山の斜面に、
三女は眠っています。法名は「釈法雄」一緒に避
難されていた、本多先生の奥様からつけて頂きま
した。短い命でしたが、戒名までつけて頂き、葬
ることができたことは、この避難生活の中では恵
まれていたのではないかと思ひます。おかげで今、
自宅の仏壇に三女の位牌を置くこともできたので
す。そんなこともできずに亡くなつた子どもが大
勢いたのです。

羽陽屯から一緒にここまで避難してきた一団の
中に、召集されていなかった本多先生のご一家が
おられました。そして一緒に引き揚げることで
きました。毎年五月に開催される弥栄会の総会に

は必ず出席され、物故者の法要をして頂いていきます。

この裏山にはたくさんの方の亡骸が葬られています。特に子どもたちが多く、朝方遊んでいた子どもでも夕方には亡くなるという状態でした。主として、三歳から四歳にかけての体力のない子どもが多く亡くなったように覚えていきます。

私の長男などは幼児期には体が弱く、よく大病をしてはたびたび佳木斯の医科大学に通っていましたので、一番心配していました。一緒に避難した小林さんの家では二人の息子さんを亡くされましたが、その代わりにというわけではないのですが、よく「正克、食べれ、正克食べれ」とかわいがってもらったためか、病気をすることもなく過ごすことができました。

一緒に避難した五歳以下の子どものなかで、内地に生きて引き揚げることができたのはほんの十数人ほどしかいません。いかに過酷な避難生活であったかお分かりになると思います。私の長男

は、その中の本当に運の良い者の一人なのです。

四 引揚げ前後の苦勞

引揚げのため大連の埠頭に移ることとなりました。いよいよ引揚げの期待が高まりましたが、実際にはなかなか引揚げが来ないので、待機しているうちに「もしかしたら内地への引揚げが永遠にできなくなるのではないか」といううわさが広まり、大変不安に思ったものです。そんな気持ちのなかでの約一カ月ほどの埠頭の倉庫での生活はとても長く感じたように思います。引揚げの期待が大きかっただけに、余計そのように感じたのかもしれない。

昭和二十一年の十二月、やっと引揚船に乗ることができました。本当に待ちに待った引揚船でした。

夢のような気持ちでタラップをのぼりました。やっと内地へ帰れると思うと、タラップをのぼりながらも自然と涙が出てきました。

引揚船は戦争中に魚雷を受けたとかで、半分傾

き掛けたような船でしたが、船での食事は今まで
の高梁のお粥から麦ご飯に変わりました。「おな
か減った」という子どもたちにとっては、これでも
何よりのご馳走でした。

蚕棚のような船倉での生活は三日ほどでしたが、
子どもたち、特に四歳になった長男などはまだ見
ぬ内地への思いからか、上甲板に出て元気に楽し
そうに遊んでいました。

佐世保近くの今の西海国立公園周辺に近づいた
とき、懐かしい日本の美しい松に覆われた島々が
見えてきました。やっと生きて内地の土を踏むこ
とができるのです。大人も子どももみんな甲板に
出て眺めていました。目尻がじわつと濡れて、涙
が自然に浮かんで来て、懐かしい日本の景色が見
えなくなってしまうです。

涙を拭いてよく見ると、島々の間には銀色の船
が何隻も見えました。おとぎの国にきたような気
分になりました。大人も子どもも「万歳、万歳」
と大はしゃぎです。無理ありません。本当に苦

しい思いをしながら、何としても内地に帰りたい
という気持ちで避難生活に耐えてきたのです。そ
んな思いが一斉に爆発したからでした。

佐世保港では、種痘や検疫を受け、頭からDD
Tの粉を掛けられました。どこかでサイレンの音
が響いています。でも、それは戦争中のような空
襲警報を知らせる音ではなく、正午を知らせるた
めの平和な音でした。

佐世保港からは、小さなポンポン蒸気の船に乗
って大村湾を進みました。白い小さなクラゲが美
しく輝いて見えます。大連の港で見たあの大きな
不気味なクラゲとは大違いでした。本当に平和は
良いな、と思いました。

大村駅から引揚列車に乗りました。関門海底ト
ンネルを潜るときは、長男に「今、海の底を汽車
が走っているんだよ」と、夫が教えていました。
私が以前内地に里帰りしたときは、下関から釜山
へは船で行ったりしたのに、今はその海の底を列
車に乗って通っているのです。

静岡か焼津の駅だったかと思いますが、朝焼けの、雲一つ無いすっきりとした、真っ白い富士山を見上げたときの感激は、生きて内地の土を踏むことができた喜びでもありました。弥栄村に住んでいたときは、小さな三角の丘に弥栄富士と名付けて拝んだりしていましたが、本物の富士山を見ているのです。何とも言えない清々しい気持ちでした。

引揚列車が東京に入ったとき、東京は一面の廃墟で、焼けただれたビルがある以外は何も見当りませんでした。駅では、満員の列車に乗客が窓から乗り込んでいました。

私たちの故郷東根の駅にやっとたどり着きました。母や兄たち一家が暖かく迎えてくれました。私たち一家と一緒にここまで来た、大江さん・奥山さんの一家も取りあえず私の実家に一泊して、次の日それぞれの実家に向かいました。

夫は、父親が召集されていて母親と一緒に避難したものの、大連で母親が亡くなり孤児となって

しまった子どもたちを、それぞれの親の実家に届けました。本当に自分の親類の子どもなのかと不審がる人もいましたが、子どもたちの両親の写真を出してもらい、子どもたちが「この人が父ちゃんだ、母ちゃんだ」と指さすのを見て納得してもらったということです。

避難生活では、たくさんの子どもたちが栄養失調と病気で亡くなりましたが、少ない食べ物を、自分が食べるものも食べずに子どもに食べさせようとして、母親が栄養失調となって亡くなった例も多かったのです。でも、弥栄村では「一人の子ども残さず内地に連れて帰る」という固い絆で結ばれた連帯感で、一人の残留孤児も出さずに引き揚げることができました。戦後五十年以上経つてもまだたくさんの残留孤児がおられますが、このように一人の残留孤児も出さずに引揚げることができたのは、奇跡としか言いようがありません。

夜の食事は、お米だけのご飯でした。長い避難生活ではお米のご飯などは口にすることもありま

せんでしたので、長男が「内地のご飯はおいしいね！」と、言いながら食べているのを見ていた私の母は、涙を浮かべていました。

私たちが無事に帰国できることを一番祈っていたのは母でした。大陸の花嫁になることに最後まで反対していた母と私の夫は、直接に血の繋がりはありませんでしたが、遠い親戚関係でした。それで、ようやく許してくれたのです。花嫁として渡満したときを持って行った物は、何一つとして持ち帰ることはできず、さらに営々と築きあげた満州での財産は何一つもなく、あるのは生きて連れて来れた三人の子どもたちと夫だけです。でも、そんな私を母は温かく迎えてくれたのです。東根小学校の主席訓導をしていた私の父は、私の女学校受験の年に亡くなりました。若くして後家になった私の母は、八人の子どもを育ててきたのです。

年頃になった私は、自分からは行きたいところにも行けなかった無念な思いから、最後の夢をか

なえるべく満州への夢を抱き、大陸の花嫁として外地に渡ったのです。そんな私の思いを知っている母が、どんなにか私たちの無事な帰りを待っていてくれたことでしょう。

でも、既に実家には母の他に、長兄健五郎の家族、次兄正清夫婦、三番目の兄健三の家族、妹の家族の四家族が暮らしていました。それに私たち五人が加わると三十人近い大家族になります。長兄は食糧事務所に勤務していた関係から、実家は不在地主ということで農地改革により、わずかばかりの土地も取り上げられてしまいました。

また、夫の実家は、明治時代に村の事業に家財を注ぎ込み、失敗して家運を傾けてしまっていました。そんなわけで、いつまでも実家の世話になるわけにもいかず、兄の健三に牛車で少しばかりの荷物と家族を乗せて運んでもらい、夫の実家から二キロメートルほど離れた、夫の弟の持ち家であるあばら屋に住むことになりました。

吹雪になると隙間から布団の上に雪が降り掛か

り、外の景色が見えるようなそんな家でしたが、一家五人はおかげさまで雨露を凌ぐことができました。快く貸してくれた夫の弟には、今でも感謝しています。

子どもたちは、夫の実家のある現在の東根市野川（旧東郷村）の東郷小学校に入学させることにしたのですが、長女の昭子は避難生活で一年四カ月の間学校に行っていなかったため、学齢から一年遅れの四年生に編入させてもらいました。ところが二女の和枝は学齢期になっていましたが、十月からの一年生への編入は、教科書が読めるならという条件で認めるという事になってしまいました。それで、家で教科書を読む練習をするのですが、本人がさっぱりその気になつてくれません。私も堪忍袋の緒を切らして、あるときには大根で二女の頭をすこーんと殴ってしまい、大根は見事に二つに折れてしまいました。そんなこともありましたが、結果的には無事に編入させてもらうことができました。このことは二女も忘れることが

できなかつたようで、後日成長して小学校の校長になってから、自校の子どもたちに当時のことを話して聞かせたこともあつたようです。そして、自分の子どもからは何回も話して欲しいとせがまれたこともあつたようです。このようにして、子どもたちは東郷小学校に昭和二十一年十二月から二十二年三月までの四カ月間通うことになりました。

この家には一年近く暮らし、夫は進駐軍の基地に働きに出ましたが、しかし自分の夢を託すような仕事ではありませんでした。

五 新天地田沢湖へ

昭和二十三年の春に、夫の親戚の人の世話で、今住んでいる秋田県の田沢湖町（旧生保内村）の牧場の畜産指導員として行くことになったのです。最初は敗戦で果たせなかつた満州開拓の夢を實現すべく、北海道開拓に行こうとしたのですが、私の母や兄たちの猛烈な反対に遭い、その希望は捨ててこちらに来ることにしたのです。

今では、日本一深い（水深四三メートル）田沢湖、「花の百名山」の秋田駒ヶ岳、国立公園八幡平や玉川温泉、秘湯鶴の湯で有名な乳頭温泉郷、冬の田沢湖スキー場などがあり、近くには桜などで有名な角館の武家屋敷などがあり、年間四百万人以上の人が訪れ、秋田新幹線が停車し東京から三時間弱で来ることができるようになり、さらには、横浜・田沢湖間には夜行高速バスも走り、全国的にも有名になったし便利にもなった田沢湖町です。しかし、昭和二十三年当時の田沢湖町は、生保内村といって東北の一寒村に過ぎませんでした。生保内線という大曲で奥羽本線から分かれ、C-11型の機関車が客車と貨車を引っ張って走っているローカル鉄道の終点で、この牧場のある高野まではバスもなく、駅から約八キロメートルの砂利道を歩いて行ったのです。もちろん子どもたちも、学校まで八キロメートルの道を歩いて通わせなければなりませんでした。

こちらへ来るに際しては、長女と二女の二人は

実家の兄や母からの「生活も安定しないところで、ましてや八キロメートルも歩いて通わなければならぬ」ところに、子どもを連れて行ったら殺すようなものだ」という強い反対に遭い、実家に預かってもらったのです。ですから二人は一年間実家から東根小学校に通わせてもらったことになりました。PTAの授業参観日には、子どものいない次兄のお嫁さんが自分の子ども代わりに喜んで行ってくれました。

この牧場では牛や羊の世話をし、また大豆トウモロコシや玉蜀黍の種を植えたりして働きました。

私たちが働いている間、長男は一緒にいるよその家の子どもたちと仲よく遊んでいました。

ある時などは、一人遊びをしていて知らぬうちに羊の放牧されている柵の中に入ってしまった、大きな雄の羊に頭でつかれて慌てて柵の外へ逃げたりしたこともあったようです。また、大きな石を持って遊んでいて自分の右足の親指に落としてしまいました。が、医者に見てもらったことなども

きずに、塗り薬で治してしまいました。今でもその親指は、変形したままの変な形になっています。

秋には近くの山に長男を連れて栗拾いに行き、湯気の出ている熊の糞に出会い、慌てて戻ったこともありました。

また、大雨の後で堰に大挙してのぼってきたウグイを捕ったりしたこともあります。栗の実や採取した山菜などは、ご飯に入れて少しでもお米を食いつなぐための大事な食料品だったのです。

しかし、給料も安く生活が安定する見込みがなく、夫は冬になる前に高原の牧場から下りて、親戚がやっている山菜の乾燥工場の一角を借りて、下駄を作る工場を始めました。

生保内にきてから一年ほどたった昭和二十四年四月には、預けてあった二人の子どもを実家から呼び寄せ、久しぶりに一家五人の水入らずの生活が始まりました。長男も小学校の一年生になりました。

田植え休みや夏休み・冬休みになると、食料品

調達もかねて、子どもたちを連れて実家に里帰りしました。

私も弥栄でならした毛糸づくりをして頑張りました。戦後の物のない時代でしたから、とても忙しく注文に追いつけないほどでした。

でも、食料品を手に入れるということは、そんなに容易なことではありませんでした。当時は鉄道賃が安かったので月に一回は実家に帰り、生保内に戻るときは、それこそどっさりと米やらサツマ芋やらを背負って帰りましたが、ある時などは「乗り換えの大曲の駅の階段で、不意に駅員から『おいこら！』と呼び止められたときにはびっくりして、体の平衡を失ってあまりの荷物の重さにひっくりかえってしまいました。駅員に『よくもこんなにたくさん背負ってきたこと！』と、呆れてしまわれたこともありました。荷物の重さを量ったら六十キログラムもあり、手荷物料金を払わされました。若かったことと、家族に食べさせなければならぬという気持ちから、そんなに重い荷物

を背負っても無我夢中で苦にならなかったのです。

長男が一年生の時、二女と長男が近くの土手に木苺の実を採りに行って、長男が蝮まむしにかまれ、私のところに泣きながら戻ってきたときには手がはれあがつていました。慌てて近くの医者に連れて行ったところ「ただ今手術中」ということで断られ、別の医者に行って血清の注射をしてもらい、危うく一命を取り留めたこともありました。この時には腕が腫れて、服を脱がせることもできないくらいでした。「あと一時間遅かったら命がなかったぞ！」とお医者さんに言われました。あの大変な避難行を耐えて、やっとの思いで生きて連れて帰った子なのにと思うと、ぞっとしました。幸い一週間ほどで回復しましたが、本人はけろっとした様子で、学校に行っても木に登って遊んでいたりして、担任の先生をびっくりさせていました。

高野には海軍の将校であったために公職追放になり、就職できなかった妹夫婦が一緒にきて、開拓に励んでいました。私の子どもたちは、よく夏

休みなどには妹の家に行って、帰りにおみやげのスイカを風呂敷に包んで、八キロメートルの砂利道を背負って歩いてきたのは良いのですが、途中でスイカを落として割ってしまい、満足な形のスイカではなくっていたなど、そんなこともありました。

下駄製造工場の経営も軌道に乗ったころ、夫は工場の経営権を譲り、自分は一会社員になりました。子どもたちの性格に商売気のないのを見抜き、上級学校に進学させる気になったようです。

私もこの工場で働きながら夜は縫い物をして家計の足しにしていました。夫は若いころ師範学校に入学することを親に反対され、東京の繊維問屋で丁稚奉公をしていたことがあります。そのため、自分の果たせなかった夢を実現すべく、子どもたちの教育には熱心でした。生きて帰った三人の子どもには高等教育を受けさせたいという気持ちが強く、それで三人の子どもには秋田大学学芸学部に進学させたのです。家計としては、小さな会社

の給料では学費を出すのは大変でしたが、弥栄で培った開拓魂で頑張ることができました。

子どもたちは、夫が自分の若いときなりたかった教師の夢を果たすべく、三人とも秋田大学学芸学部に進学し、大学卒業後教職に就き、校長などになって定年を迎えて退職することができました。

六 おわりに

満州の弥栄村から千八百人の村民が、終戦による避難を開始して無事日本の土を踏んだのは、千二百人と聞きます。その約三分の一の六百人、しかもそのほとんどが小さな子どもたちですが、異国の地で亡くなりました。私の三女も大連の丘に眠っています。でも、弥栄村からは一人の残留孤児も出してはいません。あの長く苦しい逃避行の中で村民が一致団結し、そして指導者の方の確かな判断と実行力による結果であり、感謝せざるを得ません。男手が召集されて大変なときにあれだけのことを手配できたことは、他の開拓団の悲惨な話を見聞きするたびに、よくあれだけのことを

手配し実行できたものだとしみじみと思うものです。まさに天の時、地の利、人の和のなせるわざでしょう。

苦勞した私たちでしたが、運良く何とか生きて内地の土を踏むことができました。

夫は昭和五十七年に日中友好訪中団ということで、中国視察に出掛ける機会がありました。でも、私たちの暮らした弥栄村（三江省樺川県・現黒竜江省）には行くことができなかったそうです。しかし、弥栄小学校三年生だった長女昭子が平成十三年（二〇〇二）年に訪中したときには、孟家崗（旧弥栄村）まで行くことができ、自分たちの暮らしていた家の辺りを見ることができたそうです。

あの懐かしい我が家は既に無かったようですが、水田、鉄橋、柳樹河や私たちが耕した畑までもが五十数年前と変わらず、その見覚えのある風景が残っていたそうです。

そして、元の家の近くで、王さんという老人が「ロンコウ（滝口）」に会いたいと訪ねてきてくれ

たそうです。それだけでなく、私たち夫婦の名前まで覚えていてくれたそうで、五十数年前の人間の絆は切れてはいなかったというのには驚きでした。

ただ、それ以外の場所は、場所によっては昔の小道などもあったようですが、五十数年もたつてかなり大きく変わっていたようです。

また、三女の眠っている大連の丘は海軍の施設になっているとかで、入ることができず、写真撮影も駄目だったとのことでしたが、昭子はこっそりバスの中から撮影してきたということで私にも見せてくれました。

夫は、平成十三年四月に九十歳で亡くなりました。私は今は八十八歳になり曾孫が四人になり、息子夫婦と共に元気で暮らしています。

しかし、あの昭和二十年八月十二日に避難列車に乗って逃避行を始め、昭和二十一年十二月に内地に引き揚げるまでの一年四カ月にわたった大連での避難生活。アカシアの花咲く美しい港町では

ありましたが、かわいい我が子を亡くし、飢えと寒さと病で死と隣り合わせの大連での避難生活。

これらのことは、戦後六十年近く経って平和になつた今でも、決して忘れることはできないのです。